

## 「with コロナ、after コロナにおけるホストタウン交流の在り方について」議事録

---

### (開催要領)

1.開催日時: 令和2年 11 月 26 日(木)13:00~15:30

2.場 所: 岐阜グランドホテル

3.登壇者 :

東京オリンピック・パラリンピック担当 国務大臣 橋本聖子

岐阜県知事 古田肇

岐阜市 ぎふ魅力づくり推進部 国際課ホストタウン推進室 副主査 武山慎也

中津川市 文化スポーツ部 生涯学習スポーツ課 オリンピック推進室 主事 矢野めい子

郡上市 スポーツコミッション事務局 ホストタウンリーダー 今園貴史

羽島市 企画部 市民協働担当部長 北垣圭三

岐阜県 清流の国推進部 地域スポーツ課 課長 大川敦

内閣官房 東京オリンピック・パラリンピック推進本部事務局長 平田竹男

フィールド・フロー株式会社 代表取締役 渋谷健

2016 年リオオリンピック ホッケー日本代表キャプテン 木村未由希

2012 年ロンドンパラリンピック ゴールボール日本代表 金メダリスト 中嶋茜

岐阜県立岐阜農林高等学校 後藤伶奈

岐阜県立岐阜農林高等学校 蒲原泉美

内閣官房 東京オリンピック・パラリンピック推進本部事務局 企画・推進統括官 勝野美江

岐阜県 清流の国推進部 次長 丸山淳

### (プログラム)

1.開会挨拶(ビデオメッセージ) 橋本聖子大臣

2.開催地代表挨拶 古田肇知事

3.自治体発表、相手国関係者からのビデオメッセージ

岐阜市 武山慎也

中津川市 矢野めい子

郡上市 今園貴史

羽島市 北垣圭三

岐阜県 大川敦

4.コメント 平田竹男局長

5.パネルディスカッション 「with コロナ、after コロナにおけるホストタウン交流の在り方について」

ファシリテーター 渋谷健

パネリスト 木村未由希／中嶋茜／大川敦／後藤伶奈／蒲原泉美／勝野美江

6.閉会挨拶 丸山淳

\* 敬称略・順不同

---

司会：

皆さん、こんにちは。今日は岐阜からオンラインシンポジウムをお届けしてまいります。「未来に向けて 知る・変わる・守る チーム NEXT ステップ」シンポジウムをご視聴いただき、ありがとうございます。この時間は、「with コロナ、after コロナにおけるホストタウン交流の在り方について」と題して、岐阜城、長良川、岐阜を代表するロケーションの中、岐阜県岐阜市岐阜グランドホテルから、インターネット配信によるオンラインシンポジウムをライブでお届けをしております。私、岐阜放送の伊藤伸久が本日の進行を務めさせていただきます。よろしく願いいたします。なお、新型コロナウイルス感染症防止の対策から、一部の出演者の方にはリモートでご登壇をいただくことになっています。どうぞご了承ください。

本日のオンラインシンポジウムでは、現在ホストタウンにおいては、新型コロナウイルス感染症の影響で、相手国・地域の代表選手と直接の交流が実施できていない状況となっております。その上で、今だからこそできる交流に関する取り組みを、岐阜県内のホストタウン、自治体からのご紹介、関係者によるパネルディスカッションを行うことで考えていきたいと思っております。それではまずは本日のオンラインシンポジウムの開催県であるここ岐阜県を、映像でご紹介します。

岐阜県を映像でご紹介させていただきました。本日はホストタウン交流についてのシンポジウムを開催していくわけですが、改めて皆さんは、ホストタウンとは一体何なのかというのはご存じでしょうか。ホストタウンとは、東京オリンピック、パラリンピック競技大会に参加する国・地域と日本の自治体が、多様な分野で交流を行う大会史上初の取り組みということになります。現在は 175 以上の国と地域、500 以上の自治体が登録をしております。ここで日本政府が推進しています、ホストタウンについての紹介映像をご覧くださいませ。

改めてホストタウンとは一体何なのか、ご理解いただけましたでしょうか。それでは初めに本日のシンポジウム開催にあたり、東京オリンピック・パラリンピック、橋本聖子担当国務大臣より、ビデオメッセージが届いております。

#### 1.開会挨拶(ビデオメッセージ)

橋本：

皆さん、こんにちは。東京オリンピック・パラリンピックを担当する国務大臣の橋本聖子でございます。本日は岐阜県のホストタウンの皆さんのご協力のもと、「with コロナ、after コロナにおけるホストタウン交流の在り方」をテーマとしたシンポジウムを開催する運びとなりました。誠にありがとう

ございます。本日は会場に駆けつけたかったのですが、参加できずとても残念です。皆様には来年の大会開催に向けて、またホストタウン活動につきまして、多大なるご協力・ご尽力をいただいておりますことに、心から感謝を申し上げます。

特に岐阜県のホストタウンは、11の自治体、相手国は12カ国に及び、全国的に見ても活発にホストタウン交流を推進していただいております。共生社会ホストタウンやGAP食材への取り組みなど、大会を契機に様々な分野にチャレンジいただき、大変嬉しく思っております。大会は新型コロナウイルス感染症の拡大の影響で1年延期となり、相手国・地域の代表選手等との直接の交流が実施できない状況にあります。本日は岐阜県内のホストタウン、自治体のご協力のもと、今だからこそできる具体的な交流に関する取り組みを紹介いただきます。シンポジウムの模様はオンラインで中継いたします。全国のホストタウンの皆さんにとって、本日のシンポジウムがコロナ禍でも継続可能な新たな交流の形を検討していただくきっかけになることを期待しております。本日はどうぞよろしく願いいたします。

司会：

橋本大臣からのメッセージでした。続きまして、岐阜県でのオンラインシンポジウム開催に当たり、岐阜県の古田肇知事よりご挨拶を頂戴したいと思います。古田知事、よろしく願いいたします。

## 2.開催地代表挨拶

古田：

皆さん、こんにちは。岐阜県知事の古田でございます。本日はホストタウン、オンラインシンポジウムということで、私ども岐阜県でこうして開催していただきまして、誠にありがとうございます。with コロナ、after コロナにおけるホストタウン交流がテーマだと伺っておりますが、まさにコロナ禍にふさわしい素晴らしい企画をお考えいただいて、そして私ども、この岐阜県の地を選んでいただいたということで、心から感謝申し上げる次第でございます。

今、橋本大臣から素晴らしいメッセージをいただきましたが、併せてわざわざ東京からこの岐阜の地に、内閣官房の東京オリパラ推進本部の平田事務局長にもおいでいただいております。平田事務局長は、かつて私も職場をともにした、私の最も尊敬する同僚の1人でございます。こうしておいでいただいたことに感謝申し上げます。かねてから平田事務局長とは、オリンピック・パラリンピックの意義ということについて、いろいろとお話をする機会がありましたが、常に平田さんは一過性のイベントではないんだと。どうレガシーをつくっていくか。beyond2020、このオリパラを越えたその先に何が残るか、何ができるか、ここが大事なんだということを、大変熱心に語っていただいております。その熱意を受けながら、私どもも及ばずながら自治体の国際交流ということで、どこまでこの機会に参加できるかということで、ホストタウン構想に手を上げさせていただきます。いただいた次第でございます。

2016年、第1次登録がございましたが、いち早く手を上げさせていただきます。登録いただい

た次第でございますが、現在では 11 の自治体が登録をいただいているということで、このコロナ禍においてもオンラインを活用して様々な交流を続けているところでございます。

また文化の新興、あるいは食材その他、岐阜県の魅力をこの機会に大いに磨いて発信をしていくことも大事ではないかと思っているところでございますが、GAP という食材の調達基準につきまして、岐阜県も大変多くの認定を受けているわけでございますが、この GAP 認定食材を用いたおもてなしコンテストというもの、まさに内閣のオリパラ推進本部の事務局主催で、昨年行われました。私ども岐阜県からは、岐阜農林高校の生徒が参加をいたしまして、先ほどご紹介のありました岐阜の名産であります鮎、この鮎を用いました鮎釜飯ということで、おもてなしの料理ということでお出しをしたら、見事事務局長賞をいただきました。この事務局長賞をいただいたメニューを、先ほどご紹介にあったカナダの陸上チームに、事前合宿の際に、おもてなしということでお出ししようということで、生徒の皆さんも大変張り切っているところでございまして、そうした企画についても感謝をしているところでございます。

そうした背景の中での本日のシンポジウムでございます。このシンポジウムを通じて、ますますホストタウン交流が進化をし、そしてこれがオリンピック・パラリンピック大会の成功の一端ともなり、さらにはレガシーということで、beyond2020、まさにその名のごとく、未来に向かって立派な国際交流の財産ができあがり発展していくことを、心からご期待申し上げる次第でございます。開催県を代表して今回の開催について感謝を申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

司会：

古田知事、どうもありがとうございました。それではこれより岐阜県内のホストタウン自治体から、コロナ禍の中、どのような交流に取り組んでいるかをご紹介いただくことにしたいと思います。まずは私のほうから、岐阜県内のホストタウンについて、簡単に紹介をさせていただきます。先ほどご紹介がありましたとおり、岐阜県内では 11 の自治体が、12 の国を相手国としてホストタウン登録されております。それぞれのホストタウンが特色を持って、東京大会前から相手国と交流を通して関係を深めており、大会に向けておもてなしの準備を進めております。今回はその中から、岐阜市、中津川市、郡上市、羽島市、そして岐阜県の五つの自治体から発表をいただきます。それでは初めに、岐阜市からのご紹介です。岐阜市のぎふ魅力づくり推進部、国際課ホストタウン推進室の武山慎也副主査からご紹介いただきます。武山様、よろしくお願いいたします。

### 3.自治体発表、相手国関係者からのビデオメッセージ

<岐阜市>

武山：

こんにちは。岐阜市国際課ホストタウン推進室の武山と申します。これより岐阜市の発表をさせていただきます。岐阜市はスロバキア、カナダ、コートジボワールの3カ国を相手国として、ホストタウン交流を行っています。ホストタウン登録に至るまでの経緯や交流については、3カ国それぞれ

れ特色がありますが、本日はスロバキアについて発表させていただきます。

スロバキアは、中央ヨーロッパに位置する内陸国です。首都のブラチスラバ市はドナウ川に面し、ハンガリーとオーストリアの2カ国の国境に接しています。かつてハンガリー王国の首都として栄え、現在も古い建築物が残る、歴史を感じられる都市です。スロバキアと岐阜市の交流、それは2016年、在スロバキア日本国大使館からの1通の手紙から始まりました。ブラチスラバ市はドナウ川を見下ろす高台の上にブラチスラバ城がそびえ、その街並みが岐阜市とよく似ていることから、姉妹都市交流の提案がもたらされました。それまでスロバキアと岐阜市は全く交流がありませんでしたが、ブラチスラバ市から車で約1時間程度の距離にあるオーストリアのウィーン市マイドリング区と本市が姉妹都市交流を行っていることから、交流の可能性を感じ、東京オリンピック・パラリンピックのホストタウン交流に向け、ゼロから取り組みをスタートさせることにいたしました。

2016年12月9日に、岐阜市はスロバキアを相手国としてホストタウンに登録されました。事前合宿の誘致に向けては、本市で活躍するスポーツ人財との合同練習をPRし、2018年10月には市長を代表とする岐阜市代表団がブラチスラバ市を訪問し、卓球連盟、空手連盟、パラリンピック委員会の三つの競技団体等と、事前合宿の覚書を締結しました。東京オリンピック・パラリンピック大会に向け、特色ある交流を進めているところです。

スロバキアとの交流の特色の一つ目は、大使館との連携交流です。2018年5月に、駐日スロバキア共和国大使館のご協力のもと、マリアーン・トマーシク特命全権大使を講師に招き、スロバキアの歴史と文化をテーマに講演会などを開催しました。2019年3月には、スロバキアの魅力を紹介する市民イベント、スロバキアフェスティバル in Gifu を開催しました。民族舞踊やフヤラの演奏の披露、駐日スロバキア共和国大使館提供の伝統工芸品の展示、お菓子やワインの体験、スロバキアのパラリンピアンによるトークショーや、ボッチャ体験など、多くの方にスロバキアを知っていただく機会となりました。

特色の二つ目は、本市で活躍するスポーツ人財との合同練習です。2019年6月に、スロバキア卓球連盟の代表選手、コーチらが初めて岐阜市を訪問し、練習などを行いました。札幌市で開催されたITTFワールドツアーブラチナ・ジャパンオープンへの出場にあたり、岐阜市で事前合宿を行ったものです。練習パートナーとして、国内トップレベルの選手が多数在籍する実業団チームの十六銀行卓球部や愛知工業大学、朝日大学の卓球部の皆様にご協力をいただきました。また市内のホストタウン相手国応援校の中学校の卓球部員が事前合宿を見学し、一緒にラリーをするなどして交流を深めました。

次に、空手の事前合宿受け入れに関わる取り組みです。2019年8月には、スロバキア空手代表選手とコーチが事前合宿のため岐阜市を訪問しました。空手1プレミアリーグ東京大会への出場にあたり、岐阜市で事前合宿を行ったほか、世界選手権4連覇を達成し、ギネス記録にも認定された若井敦子さんが総監督を務める西濃運輸空手道部や、中部学院大学空手道部のご協力を得て、合同練習を行いました。合宿期間中には、ホストタウン相手国応援校の中学校を訪問し、生徒と交流を深めたほか、歴史博物館を見学し、着物の着付けを体験するなど、本市の歴史や文化に触れていただきました。

特色の三つ目は、共生社会ホストタウンの取り組みです。本市はオリンピック、パラリンピックの区別なく、事前合宿競技の誘致を行い、パラリンピック委員会とも何度も面談し、信頼関係を築いてきました。2019年9月には、スロバキアのパラリンピック卓球とボッチャの選手団が岐阜市で事前合宿を行いました。歓迎夕食会では、岐阜県からの提供により、市内産の枝豆や天然鮎、グローバル GAP の認証を受けたお米などの、岐阜県産の食材を使用したメニューでおもてなしをしました。またホストタウン相手国応援校の小学生が練習を見学し、選手らが学校訪問を行い、ボッチャや卓球と一緒にプレーするなど交流を深めました。合同練習においては、パラ卓球日本代表選手、朝日大学、岐阜ボッチャ協会等のご協力をいただきました。こうしたことから2019年12月に共生社会ホストタウンに登録されました。

特色の四つ目は、ホストタウン相手国応援校の取り組みです。本市では2019年3月に、ホストタウン相手国の事前合宿受入競技ごとに、選手らとの交流を行う応援校を募集し、スロバキアについては5校を選定しました。応援校の取り組みとして、各学校の子どもたちが相手国を応援するフラッグを作成しました。どのフラッグも力作ぞろいです。完成したフラッグは、2019年10月に開催された第63回ぎふ信長まつりにおいて、披露されました。各学校の子どもたちが、祭り当日に応援フラッグを持ってパレードに参加しました。当日は多くの観客が沿道に集まり、応援フラッグを披露する良い機会となりました。また今年の2月には、ぎふメディアコスモスにおいて、応援フラッグ展を開催し、応援校の取り組みを来館者に見ていただきました。来年の東京大会では、ホストタウン登録自治体向けチケットを活用し、応援校の児童生徒代表が、会場で応援する機会を持てるよう検討しているところです。

特色の五つ目は、複合施設みんなの森ぎふメディアコスモスで開催した市民との交流イベントです。本市では2019年7月から9月にかけて、ホストタウン事業を広く啓発するとともに、相手国について知っていただくため、様々な市民との交流イベントを開催いたしました。7月にはオリンピック講演会として、2004年アテネ五輪、卓球男子ダブルス出場の鬼頭明氏を講師に迎え、講演をいただきました。8月にはパラリンピック講演会として、2012年ロンドンパラリンピック、ボッチャ出場の加藤啓太氏を講師に迎えた講演会などを開催しました。9月には、ホストタウンウィーク2019スロバキアデーを開催し、空手家の若井敦子さんとスロバキア空手チームのトークショーや、スロバキアのお菓子の試食体験などを行いました。2020年2月には、ホストタウンウィーク2020を開催し、2008年北京五輪、陸上女子5,000メートル出場の小林祐梨子さんと、2012年ロンドンパラリンピック、車椅子マラソン出場の花岡伸和さんを招いたトークショーやボッチャ大会などを行いました。ボッチャ大会には、市内の企業や応援校の児童など、16チームが出場し、パラリンピック競技への理解を深め、試合を楽しんでいただきました。

最後に、コロナ禍における取り組みを紹介します。今年度も直前合宿やオリンピック・パラリンピックを招いた講演会の開催などを予定しており、機運を高めていこうと考えておりましたが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、オリパラが1年延期され、イベントもほとんどが中止となったため、事業の見直しを図ることとなりました。来年のオリパラ本大会に向けて、ホストタウン交流を継続していくため、新しい形での交流を推進していきたいと考えております。

日本郵便株式会社との連携事業として、「ホストタウン相手国・地域へお手紙を送ろう」を活用して、応援校の子どもたちが相手国に向けたメッセージを作成し、先日駐日スロバキア共和国大使館へ送付されたところです。またホストタウンフレーム切手を 500 シート作成し、市内の郵便局や郵便局 Web ショップで販売をしています。

今後の取り組みとしましては、応援校の児童生徒や、合宿受入関係者からの応援メッセージ動画を作成し、相手国へメッセージを届けたいと考えており、現在各学校と調整し、撮影に向け準備を進めているところです。動画には with コロナの日常や学校生活の様子も織り交ぜて紹介し、コロナ禍においても元気な子どもたちから、スロバキア選手団の皆さんへ、来夏の東京大会に向けた希望となるメッセージ動画になればと考えております。今後もスロバキア在住のホストタウン交流コーディネーターと連携し、来年に向けた取組みを進めてまいりたいと考えております。以上で岐阜市の発表を終わります。ありがとうございました。

司会：

武山様、どうもありがとうございました。では岐阜市がホストタウンを務めるスロバキアのアスリートから、メッセージ映像が届いております。ご覧ください。

(映像)

事前に日本のこと、そして岐阜のことを勉強していただいているようですね。スロバキアからのアスリートメッセージでした。

では続いて、中津川市からのご紹介です。中津川市文化スポーツ部生涯学習スポーツ課オリンピック推進室、矢野めい子主事からご紹介いただきます。矢野様、よろしくお願いいたします。

<中津川市>

矢野：

中津川市の矢野と申します。よろしくお願いいたします。只今からアメリカ合衆国レスリングチームと中津川市のホストタウン交流について、発表いたします。

まずアメリカ合衆国の新型コロナウイルスの感染状況としましては、11 月に入ってから1日当たりの感染者数が 10 万人を超え続けており、11 月 20 日には日本の累計感染者数の 1.5 倍にもなる 19 万 8,000 人が 1 日に感染するなど、アメリカ国内での累計感染者数は 1,200 万人を超え、世界でも群を抜いた深刻な感染状況となっております。来年の事前合宿で中津川市に来日予定のアデリン・グレー選手は、オリンピックトレーニングセンターがコロナのために閉鎖され、一時的に住む場所をなくしてしまうなど、選手たちにも影響を及ぼしました。今は安心して暮らせる家があり、食事制限やトレーニングに励むことができているそうです。このように当たり前のように生活をし、トレーニングができる日常を失っても、選手たちが日々の努力を怠ることなく、前向きにトレーニングに励んでいることを忘れないように、中津川市としても選手ファーストでアメリカ選手団の受け入

れ準備を進めていきます。このようなコロナ禍でも信頼関係を築くことができたのは、昨年の事前合宿が大きく影響しております。

最初に中津川市がアメリカでレスリングチームのホストタウンになった経緯について、お話しいたします。2018年3月、女子レスリングワールドカップをきっかけに、中津川市とアメリカレスリングチームの交流が始まりました。2019年1月、コロラドスプリングにて中津川市長とアメリカレスリング協会は、事前合宿を中津川市で実施することについて同意しました。同年4月に中津川市は正式にアメリカのホストタウンとして登録され、同年7月に事前合宿でアメリカレスリングチームは10日間、中津川市を訪れました。合宿初日には歓迎式典ということで、両国の国歌斉唱を行い、右の写真のように地元の子どもたちが選手団を出迎え、中津川市への訪問を歓迎しました。アメリカレスリングチームの代表と中津川市の代表が、双方に対する熱い思いを語り、事前合宿がスタートしました。

事前合宿での市民交流としましては、選手たちは地元の幼稚園児たちとレスリングマットの上で、右の写真のように体を動かして触れ合いました。選手たちが日頃行っている簡単な基礎トレーニングをレクチャーしていただき、マットの上で体を動かしました。言葉は通じない中でも、子どもたちが選手とたわむれる姿や無邪気な子どもたちに選手たちが癒されている様子がとても印象に残っており、市民交流の重要性を痛感した事前キャンプでした。今後はコロナ禍でもできる市民交流にも取り組んでいきたいと思っております。

事前合宿でのおもてなし・文化交流としまして、中津川市と日本の文化をアメリカレスリングチームへ伝えました。合宿中に行われた歓迎レセプションでは、マグロの解体ショーを行い、選手たちの人気が高いお寿司を提供することによって、日本の食文化を体験いただいたり、地歌舞伎を地元の団体に講演していただきました。選手たちは楽しそうにおひねりを投げたり、見栄を切るポーズで写真撮影をしたりと、中津川市のおもてなしを楽しんでいたようでした。また右の写真のように、市内在住のアメリカ人の方から弓道の型を披露していただいたり、日本の伝統スポーツも体感していただきました。

さらに左のように、地元の高校の茶道部員たちによる茶道教室を行い、浴衣を着た高校生たちから英語による茶道指導もしていただき、とても充実した市民交流及び文化交流となりました。また右のように、合宿場所に盆栽を展示し、厳しいトレーニングの中でも味わえる日本流のリフレッシュを、選手たちに体験していただきました。

事前合宿でのトレーニング環境の充実化ということで、合宿場所にレスリングマットが常時ない施設でしたので、レスリングマットを設置し、トレーニングマシンやプール、サウナなどを設置することによって、選手たちが練習に打ち込める環境の整備に力を入れました。アメリカにいるときと変わらないような本格的なトレーニング機器を使用した練習ができるように、市内のトレーニングジムと連携して、練習環境の充実化に努めました。さらには選手たちの練習は一般公開としまして、間近で迫力のあるトップアスリートのプレーを見ることができ、市民の方々には大変貴重な経験になりました。

事前合宿後の交流記録では、10日間の事前合宿が無事に終わった4カ月後に、女子レスリン



グワールドカップ大会への観戦ツアーを市民向けに企画しまして、左のように市民と共に、千葉県成田市へアメリカレスリングチームの応援へ駆けつけました。また右の写真のように、成田への観戦ツアーの後日、アメリカチームの関係者が再び中津川市を訪れ、2020年の直前合宿に向けた合宿施設やトレーニングジム、ホテルなどの視察を行い、直前合宿開催への最終確認を行いました。

最後に、2020年のコロナ禍における交流としまして、アメリカレスリングチームとの共同SNSの運営を行っております。利用しているSNSとしましては、言語を気にすることなく、写真ビジュアルをメインで利用することができるInstagramを選択いたしました。共同運営の方法としましては、共通のログインIDとパスワードを共有し、双方から記事を投稿することができます。それによってお互いの国の季節や食べ物、風景やイベント、また選手たちの練習風景等、時差を関係なくリアルタイムをシェアすることができます。今後の目標としましては、オリパラ関連のイベントを動画で投稿し、両国への応援メッセージを投げ合える場所として、Instagramを活用していきたいです。さらには、多くの人にこのアカウントで中津川市とアメリカレスリングチームの交流の様子を知っていただき、来年の東京オリンピック・パラリンピックの機運醸成を行うアカウントとして、積極的に情報発信をしていきます。

アメリカのホストタウンとして、今できる交流を推進し、来年度の東京オリンピック・パラリンピックの実現に向けて、選手たちを受け入れる街として準備を進めていきます。以上で中津川市の発表を終わります。ありがとうございました。

司会：

ありがとうございました。アメリカ合衆国のホストタウン、中津川市。競技種目はレスリングということです。ではアメリカ合衆国のアスリートからのメッセージ映像もご覧ください。

(映像)

本当に考え方が前向き、ポジティブというのか、つつい応援したくなりますね。

では続いてまいりましょう。郡上市からのご紹介です。郡上市スポーツコミッション事務局、今園貴史ホストタウンリーダーからご紹介いただきます。よろしくお願いいたします。

<郡上市>

今園：

オーラ、コモエスタス。皆さん、こんにちは。郡上市スポーツコミッション事務局のホストタウンリーダーをしております今園と申します。郡上市はコロンビアとマダガスカルの2カ国とホストタウン交流を行っていますが、本日はコロンビア交流について、報告をしたいと思えます。まずコロンビアのコロナの状況ですが、今年の3月25日から全土でロックダウンが実施されておりました。9月からは各地で制限が緩和され、徐々に落ち着きを取り戻しているとの連絡を受けております。

それでは、郡上市とホストタウンの活動について、大きく今日は三つに分けて説明していきたいと思えます。まず一つ目は、地方創生としてのホストタウン活動について。二つ目は、ホストタウン交流。三つ目は、ホストタウン交流から生まれたレガシーについてです。

まず一つ目の、地方創生としてのホストタウン活動の話ですが、郡上市は 2017 年度から、政策推進の旗印として観光立市郡上を掲げており、その中にスポーツで観光を盛り上げていこうと、スポーツツーリズムを取り入れました。そこでスポーツ合宿村として多くの方々に知ってもらうため、グラウンドを整備し、2019 年ラグビーワールドカップ、2020 年東京オリンピックに出場可能のあるチームを誘致し、認知度を高めていこうと、競技をラグビーだけに絞り、誘致活動を行ってきました。

2017 年度までスポーツで国際交流がなかった郡上市としては、全てが手探り状態。毎日毎日が、出口の見えない暗闇を進むようでした。この分野を話すと2時間ぐらいのドラマができますので、今日は省きますが、右往左往しながらも 2018 年2月に、コロンビアラグビー連盟とホストタウン契約を結ぶことができました。2018 年9月には、ユースオリンピック代表のコロンビア女子ラグビーチームが事前合宿を行い、翌年 2019 年にはマダガスカル女子ラグビーチームも加わり、たった2年間で郡上市はラグビー関係者を中心に、全国的にもラグビー熱の高い街として多くの方々に知られ、今では多くのスポーツ競技団体の関係者から、合宿や大会開催についてのお問い合わせが多くなっております。まさに郡上市はホストタウン活動を通して、地方創生が図られています。

次に二つ目です。郡上市では 2018 年、そして 2019 年の事前合宿が行われたことで、2 度の交流の機会を設けることができました。1 度目となるユースオリンピック代表チームの交流会は、地元の小学校、中学校、高校と計5回にわたり、交流会を行いました。ホストタウン担当の私としては、多くの学生と接することで、子どもから親へ交流の話が伝わり、そして親から市民の方々へ話題が広がると想定しておりましたが、しかし現実ほとんど市民の方々が、ホストタウンのこともコロンビアチームが合宿したことさえも知らない状況でした。

そこで 2 度目となる事前合宿では、多くの市民の方々にホストタウン交流を知ってもらうため、両チームが来日する前から地元の学生ボランティアを集い、学生を中心としたアイデアで両チームの紹介番組をケーブルテレビで放送したり、他のメディアでも話題となるよう、郡上の最大のアイテムである郡上踊りとラグビーを融合させて、ラグビー大会の開会式やポスター、チラシ、デザインなど、多くのアイデアを加えました。これが功を奏し、郡上市民だけにとどまらず、県外の方々からも、郡上市は積極的にホストタウン交流を行っていると思われるようになりました。もちろん今年も両チーム、郡上市で最終予選に向けた事前合宿を行う予定でしたが、コロナの影響で中止となりました。

今、with コロナということで、両チームとの交流は、SNS や動画を使っただけの交流になっています。郡上市としては、ネットを使って世界中の方々に、スポーツで積極的に交流を行っている街ということを知ってもらうため、最高のチャンスと捉え、今後も学生を中心にネットでいろいろな情報や話題を発信していこうと考えております。郡上市は after コロナの交流に向けて、今まさに積極的に取り組んでいるのです。

最後に、ホストタウン交流から生まれたレガシーについて。両チームが来日した際に、大会など

で選手たちのお世話をするおもてなし隊を担当した女子学生が中心となり、ラグビーをやってみたいという声があり、さらにはホストタウン交流を行った小学生からもラグビーをやってみたいと要望が高まり、なんとラグビーの文化のなかった郡上市に、ラグビークラブが発足しました。今では小学生から一般まで多くの方々が所属するクラブへと成長しております。まさしくホストタウン交流から生まれたレガシーなのです。

それでは最後に、郡上市がコロンビアに送っている動画の一部を、今から見ていただきたいと思います。

(映像)

これで郡上市からの報告を終わります。ご清聴、誠にありがとうございました。

司会：

お互いの街にとって本当にいい刺激になっているようですね。ではここで、コロンビアのアスリートからのメッセージ映像をご覧ください。

(映像)

皆さん、本当に日本語が上手ですし、郡上の自然はインパクトが強かったようですね。

では続いて、羽島市からのご紹介にまいりましょう。羽島市企画部の北垣圭三市民協働担当部長から、紹介いただきます。よろしくお願いいたします。

<羽島市>

北垣：

皆さん、こんにちは。羽島市の北垣と申します。羽島市はスリランカのホストタウンです。このスリランカと、人と人との交流をメインテーマとしたホストタウン交流事業について、私からお話をさせていただきます。

皆さんはスリランカという国名にはあまりなじみがないかもしれませんが、セイロンと言えばお分かりになるでしょうか。1948年にイギリスからセイロンとして独立し、1978年に現在の国名スリランカになりました。こちらの地図にあるように、スリランカはインド洋に浮かぶ島国で、大きさは北海道より一回り小さく、人口は2,000万人ほどです。地図の下の写真をご覧ください。左上の写真ですが、スリランカの紅茶はセイロンティーと呼ばれ、世界中で愛されています。右上の写真ですが、食事はスパイスを多く使用し、食卓にはカレーが毎日並びます。日本の味噌汁のような感覚ですので、飽きることはないということでございます。左下の写真ですが、シーギリヤロックと呼ばれる世界遺産で、スリランカにはこのシーギリヤロックを含めて8個の世界遺産があります。右下の写真ですが、スリランカにおいてゾウは神聖な動物とされています。旅行のお土産にもゾウがあしら

われた商品が人気となっております。

多くの自然と様々な文化に富んだ国スリランカ、そんな魅力あるスリランカと羽島市とのつながりについて、説明をさせていただきます。それでは右の写真をご覧ください。2002年頃から市民の方々が中心となり、スリランカの学校にトイレを作り、市で役目を果たした救急車などを寄贈するボランティア活動が継続的に行われてきました。またオリンピックを契機として、国際交流事業をより活発化させようという市の考えもあり、2017年にスリランカのホスタウンとして登録をされました。

左の写真は昨年、スリランカのオリンピック委員会と大会終了後に交流についての合意書を締結した際の写真でございます。次に右の写真です。ホスタウン登録を受けて、二つの団体が発足しております。まず上の写真のホスタウン実行委員会は、市内で国際交流やスポーツ活動に励む市民らで組織をされております。実行委員会の事業費は、市内の企業である一般財団法人国際クラブ様からの寄付で賄っております。また下の写真は、サポートスリランカ、市役所の職員約30名で結成されております。メンバーの中にはスリランカに行ったことがある人がおり、基礎的な会話なら可能な職員もおり、様々な場面で力を発揮してもらっております。

次に、これまでの交流について説明をいたします。羽島市では大会終了後に、スリランカ選手団と小中学生を中心とした交流事業を行う予定をしております。そのため、スリランカ出身の方を講師に招き、小中学生を対象にスリランカを知ってもらう授業を実施しています。授業では写真などを用いて、スリランカの歴史や文化などの紹介を行っています。また右の写真にもありますが、伝統的衣装でもありますサリーの着付け体験も行っています。この授業はホスタウンに登録されてから毎年実施しており、今年で4年目を迎えております。

続きまして、2018年に岐阜市で開催されましたアジアジュニア陸上競技選手権大会の交流について、説明をいたします。この陸上大会に合わせて、岐阜県主催で1校1国の応援事業というものがございました。左上の写真は、その中で来場応援をした児童の様子です。羽島市はこの陸上大会を絶好の機会であるにとらえて、スリランカの選手に1日多く日本に滞在してもらう計画を立てました。右上の写真は大会が終わった翌日、選手団に中学校を訪問してもらい、日本の文化や遊びを体験してもらった様子です。左下の写真は同じく訪問した中学校で、スポーツを通じた交流を行った様子です。また右下の写真ですが、中学校を訪問したその夜に、おもてなしのパーティーを開催いたしました。中学生と高校生も20名ほど参加していただき、英語やジェスチャーを使ってコミュニケーションを図ろうとする生徒が多く見られました。

その他の取り組みといたしまして、まず上の写真ですが、家庭に眠るスポーツ用品や鍵盤ハーモニカをスリランカの青少年へ届けようとするもので、市の広報誌などで呼び掛けを行い、現在も収集を行っております。次に左下の写真です。市内の幼稚園では、スリランカのセイロン瓜を栽培してくれました。ヘルシーな野菜のセイロン瓜ですが、くねくねとした蛇のような形に育つことから、蛇瓜と呼ばれております。そして右下の写真は、新幹線の駅前で開催されるぎふ羽島駅前フェスです。ここではPRブースを出展し、セイロンティーの試飲や、伝統衣装であるサリーの着付け体験を行い、スリランカの文化を市民の皆さんに広く知っていただく機会としております。残念ながら

今年はコロナの影響から、このお祭りは中止となっております。

次に羽島市独自の取り組みといたしまして、陸上競技の指導者や、消防職員をスリランカへ派遣した事業について、ご紹介をさせていただきます。陸上競技の指導では、朝日大学さんからご紹介いただきましたメキシコオリンピックに出場された小倉新司さんと、同大学で栄養学を専門とする塚中敦子さんを、スリランカへ派遣しました。オリンピックの小倉さんからは、専門である走り幅跳びの踏み切りや空中動作、また現地の環境を考慮して、器具に頼らない練習方法などを指導していただきました。一番右の写真、塚中さんは水分補給やエネルギー摂取などについて、講義を行っていただきました。また下の写真は 2018 年に市長がスリランカを訪問した際、空軍の副司令官より消防救助技術の向上に向けた支援要請をいただいたことから、本市消防職員の派遣を行った様子です。陸上競技の指導者派遣は、2018 年、2019 年の2回、消防職員の派遣は 2019 年の1回行っております。

続きましてここからは、コロナ禍における交流についてお話をさせていただきます。他の自治体さんもやっておられると思いますが、日本郵政様によるホストタウンフレーム切手を作成するとともに、手紙を送ろうプロジェクトに参加しております。コロナ禍においても新しい形での交流を模索しながら、継続して行うことがホストタウン交流には不可欠でございます。そして先ほども説明したスリランカの歴史や文化を紹介する授業の中で、今年は子どもたちからスリランカの選手に向けた応援メッセージの動画撮影も行っております。完成次第、スリランカのアスリートへ送る予定でございます。

以上、羽島市とスリランカとの交流の軌跡となります。現時点でのスリランカのコロナの感染状況は約2万人で、地域によっては厳しい行動制限があり、予断を許さない状況が続いております。一方で選手たちはオリンピックに向けて、立場や状況に応じてそれぞれ練習を重ねているとお聞きしております。そういった選手を最大限のおもてなしでお迎えできるよう、先ほど説明いたしましたアジアジュニア陸上大会での選手との交流をベースとしながら、羽島市ではこれからも人と人との交流を推進してまいります。

最後になりますが、これまでの交流で築いた友好関係を一過性のものにするのではなく、様々な面での人材交流や社会経済、文化など、多岐にわたる活動に今後さらに協力していけることを期待し、私からの発表とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

司会：

羽島市はスリランカのホストタウンということになりますね。ではそのスリランカからは、オリンピック委員会からメッセージが届いています。

(映像)

日本通というのか、日本にやはりお詳しいですね。続いて最後になりますが、岐阜県からのご紹介になります。岐阜県清流の国推進部地域スポーツ課、大川敦課長からご紹介いただきます。

大川課長、よろしくお願いいたします。

<岐阜県>

大川:

皆さん、こんにちは。岐阜県地域スポーツ課、大川でございます。県ではホストタウン登録、3件させていただいております、それぞれ地元の自治体と共同で登録をさせていただいております。今回ご紹介させていただきますカナダにつきましては、岐阜市さんとの共同で登録をいただき、事業を進めているところでございます。それでは、取り組みについて紹介をさせていただきます。

まずは、なぜカナダかということでございますが、もともと本県では東京オリンピック・パラリンピックの各国の事前合宿を積極的に誘致しようということで、誘致活動を進めておりましたところ、カナダ陸上競技連盟が本県の岐阜メモリアルセンターを合宿地に決めていただきまして、2018年11月に合意文書を締結したこと、これが始まりでございます。そして12月には県と岐阜市が共同でホストタウンに登録をいただきました。また翌年12月には、共生社会ホストタウンにも登録させていただきまして、共生社会に向けた取り組みも推進しているところでございます。

こうした経緯でスタートしたカナダとのホストタウン交流でございますが、コロナ前の交流といたしまして、カナダ陸上チームとの交流と、それから地域での機運醸成、この2本柱で進めてきたところでございます。まずカナダ陸上チームとの交流でございますが、2019年5月、横浜での世界リレー、リレーの世界選手権、これにカナダチームが出場するとの情報をキャッチしまして、そのための事前合宿を岐阜で1週間ほどしていただきました。その機をとらえまして、高校陸上部とのスポーツ交流や、小学校を訪問して、カナダ選手やカナダ文化の紹介をしていただきました。

続いて同じ年の7月、今度はパラ陸上の国内最高峰の大会、ジャパンパラ陸上の岐阜県開催が実現いたしました。ジャパンパラでございますが、これは海外からの参加もできる大会でしたので、カナダ代表選手も出場されるという情報をキャッチしまして、事前合宿の実施、そして子どもたちとパラリンピアンとの交流が実現したところでございます。私の発表後に選手のメッセージビデオを流してもらいますが、この写真に写っているマックイーン選手がこの映像となっております。コロナ禍の今から見ると、隔世の感を禁じ得ないところでございますが、選手が来日され、学校訪問や競技場で直接生徒と触れ合う交流を重ねると併せて、地域での機運醸成にも取り組んでまいりました。

その一例がこちらでございます。2019年8月に在名古屋カナダ領事館領事をお招きしたカナダセミナーや、セミナーに合わせたカナダ料理の紹介、これは岐阜市主催で実施をされました。

また、今日のパネルディスカッションに出演いただく岐阜農林高校の皆さんにご参加いただきまして、彼らが生産するGAP認証米を使った料理と、生徒さん自らが実演する結婚式を組み合わせたおもてなし、これを企画・実施してもらいました。コンテストでは事務局長賞を受賞され、さらにこの取り組みを後輩の方にも受け継がれて、来年に向けた準備を始められているところでございます。

2019年から2020年頭にかけて、選手との交流や機運醸成の取り組みを行いまして、いよいよ

本番に向けて準備を加速させようとしていた矢先に、新型コロナウイルス感染症の感染拡大、そして東京オリンピック・パラリンピック競技大会の延期が3月に決定されまして、われわれも半ば茫然自失という状態でしたが、いつまでもそんなことを言っていられないということで、本年4月、カナダ陸上競技連盟に対して、延期の1年を使ってさらに交流を深めたいと連絡を取りまして、カナダ側からも快く承諾をいただきまして、コロナ禍でのホストタウン交流を進めているところでございます。

コロナ禍でできる交流としては、ソーシャルメディアに着目しまして、本年8月にはカナダとのホストタウン交流プロジェクトの公式 SNS、Twitter・Instagram・Facebook を開設いたしました。これまでの取り組みとしましては、10月には岐阜からカナダへ応援・歓迎メッセージ動画を、高校の陸上部の皆さん、英会話部の皆さん、チアリーダー一部の皆さん、本当にたくさんの参加をいただいて公開をしました。そうしましたところ、今度11月にはカナダ選手、5人の選手の方からお返しのメッセージ動画をいただきまして、公開をさせていただきました。本当に皆さん、いいばかりでございまして、高校生からの動画に答えて、丁寧なメッセージをいただいたところです。メッセージ動画に参加した生徒さんからは、ご自身の動画に対して、カナダのトップ選手からメッセージが来たことへの喜びの声も多数聞かれまして、よりカナダを身近に感じられた企画ではなかったかと感じております。

今は第2弾としまして、今度は小学生、中学生からの動画も公開しようということで、岐阜市さんと連携して進めているところです。今度はぜひ双方向のリアルタイムで交流したいということで、ほんの先日ですが、カナダパラリンピアンと県内パラアスリートとのオンライン交流イベントを開催いたしました。東京パラリンピック出場が期待される県ゆかりのパラアスリートや、特別支援学校陸上部の生徒の皆さんにも参加いただきまして、コロナ禍での練習状況や大会前の準備方法など、アスリート同士だからこそ通じ合う交流となりまして、これまた参加者から喜びの声をいただいております。

また SNS を使って地域住民に向けた情報発信もしておりまして、カナダ料理の紹介動画を県内の東海学院大学と連携して制作し、発信もしております。スポーツに関心を持っている方々以外の多くの方々に、ホストタウン交流の関心を持ってもらえるよう、その他にも多数の企画を実施しておりまして、取り組んでいるところでございます。このようにコロナ禍にあっても、またコロナ禍だからこそ、知恵を出し合ってカナダとの絆を深める交流を進めてきております。

残念ながらカナダのほうでも、現在感染症の拡大が進んでおりまして、現在では1日5,000人弱の感染者の方が出ているということでございます。また最大都市のトロントではロックダウンも行われる予定ということで、予断を許さない状況ではございますが、今後の展望としましても、コロナ対策をしっかりと踏まえまして、まず一つ目の取組ですが、大会直前に向けて、やはり SNS を活用したオンライン交流イベント、小中学生からの応援・歓迎メッセージ動画の発信など、さらに機運醸成を図ってまいりたいと考えております。

また東京大会前後のカナダ陸上チームとの交流を行っていきたいということで、これはコロナ対策をしっかりとした上で、選手とのリアルでの交流を何かできないかということで、どういことができ

るのか、知恵を出し合って検討を進めたいと思っております。そして三つ目の東京大会後においても、2022年に神戸で開催予定の世界パラ大会がございます。その折には岐阜県で合宿をぜひしていただき、県民の皆様と継続して交流をしていただきたいと思いますと考えております。

このように東京大会を目指して育ててきたホストタウンの花が、ぜひ東京大会の機に咲いて、それからまたさらに新しい種を生み出して、新しい花が咲く。こういったホストタウン交流を目指して、取り組んでまいりたいと考えております。岐阜県とカナダとの交流については、以上でございます。

司会：

将来にわたってのホストタウンの交流というのが、本当にきれいな花を咲かせてくれることを期待したいですね。ではカナダのアスリートからのメッセージ映像も届いております。ご覧ください。

(映像)

本当にスポーツだけではなくて、文化交流も皆さん期待をしていらっしゃるようですね。ここまで岐阜県各自治体の皆様からホストタウンの取り組みをご紹介してまいりましたけれども、ではここで、内閣官房東京オリンピック・パラリンピック推進本部、平田竹男事務局長よりコメントをいただきたいと思っております。平田事務局長、よろしくお願いいたします。

4.コメント

平田：

本日は皆さん、ご苦労様です。このホストタウンシンポジウムを岐阜でやらせていただき、私は昨日からまいったわけですが、ここまでホストタウンの交流が進んでいるということを聞かせていただき、本当に感動いたしました。オリンピック・パラリンピックは来年ですが、私たちが7年前に考えた、こういう交流ができればいいなということが、すでに実現しているということを感じた次第です。そしてまたコロナで、この交流が途絶えているのかなと思ったわけですが、各ホストタウンの皆さんからお話を伺いますと、オンラインで交流が進んでいますし、またオンラインで日本語のメッセージがあり、外国の方が日本語まで使って、こういう交流が進んでいるということは、本当に感動した次第です。

私は2013年に推進本部の事務局長になったわけですが、オリンピック・パラリンピックはスポーツの大会ですが、スポーツの大会以上に、各地に大きなものを残したいと思えました。私の原点として、2002年のワールドカップを、私はサッカー協会の立場でやらせていただいたわけですが、カメルーンが大分で、クロアチアが新潟でなど、各地でサッカーと地元が交流したという、それが原点としてあるものですから、オリンピック・パラリンピックの開催が日本で決まったという、アルゼンチン、ブエノスアイレスの地に私はいたわけですが、まずやりたかったのはこのホストタウンです。そしてこのマークを beyond2020 とつくったのも、2020年のスポーツの大会ですが、それ以降に残っていくものをつくりたいということがあったわけです。



これを私がこよなく尊敬しています古田知事に、どういうふうにやったらいいかという、現場的なお話をずっと相談させていただきました。古田知事はフランスのことにも詳しいし、アメリカにも住まれたし、そして私は古田さんと、ベトナムやインドネシア、各地と一緒に出張したこともあるものですから、古田さんが私のホストタウンの仕掛けに関する最大の相談相手だったわけですが、第1次募集のときから岐阜に手を上げていただいて、それからずっと見ているわけですが、今日（こんにち）来て、本当に感動した次第であります。また女性の矢野さん、中津川市、アメリカ、男性が悪いわけではないですが、大変ディープに交流をされている、あるいは岐阜市がパラリンピックで、バリアフリーにも通じるような試みをされて、そして郡上市、ラグビー、本当に素晴らしいし、私が考えておりました事後交流というところも、スリランカ、羽島市が深く入っていただいているということに、本当に感動した次第です。

今東京では補正予算を検討しているわけですが、これだけの交流が進んでいる皆さんを前にして、また思いを新たにすることは、やはりコロナの対策、検査をする費用や医療機関の費用、こういったものを国が100%出すということ、ぜひ進めていきたいと思っております。まだ決まったものは何もないですが、私たち事務局の原案としては、現地でおもてなしをするときに必要になる検査の費用、あるいは医療機関との連携の費用、それから交通機関のためにスペースを空けたりして余計にかかる費用などがありますし、さらにホテルでもワンフロアを分けたりする費用が必要になると思いますが、そういった費用は全て国のほうで持たせていただくという思いを強くしました。これがどうなるかは後日のご連絡になりますが、スキームとして、考え方としてはこういったことで私は事務局として動こうと、今日（こんにち）皆さんのお話を聞いて強く思った次第であります。

コロナを乗り越えて、これだけオンライン交流が進んでいますが、やはり現場でお迎えして交流するためには、ワクチンだけではなくて、やはり検査というものが重要になりますので、そういったところをぜひわれわれが全面的にバックアップしますので、前向きな交流をさらに考えていただければと思います。私は8年間、オリンピック・パラリンピックの準備をしてきましたが、2020年を越えて、オリンピック・パラリンピックの大会というのは、スポーツの大会ではありますが、スポーツを越えたバリアフリーや文化や食、こういったことを実現するためにあると思っておりますし、2021年のイベントですが、それを越えてずっと続いていくものになりたいと思っておりますし、東京で大会はたくさんありますが、東京のイベントにはしたくないということを強く思ってきましたが、今日（こんにち）この岐阜に来まして、この5人の方の発表を、古田知事とずっと聞かせていただいたわけですが、本当にホストタウン制度をつくって良かったと思いましたが、ここまで世界各地の交流を進めていただいたホストタウン各市の担当の皆様、心から敬意を表したいと思います。本当に今日（こんにち）までご苦勞様でした。来年の本番を迎えて、頑張ってくださいと思いますし、これからずっとこの交流の輪を広げていただきたいと思います。本日はどうもご苦勞様でした。

司会：

平田事務局長、どうもありがとうございました。以上をもちまして、前半第1部を終了とさせていただきます。この後、ここ岐阜県ご出身でオリンピック・パラリンピックに出場された選手の皆様、

県内の高校生、そして有識者の皆様によるパネルディスカッションを行わせていただきます。ぜひ第2部も引き続きご視聴いただければと思います。

それでは第2部の準備の間に、皆様には今年7月から開設をされておりますが、ホストタウン専用Webサイト、Light up HOST TOWN Project、「世界はもっとひとつになれる」のご紹介をさせていただきます。こちらのホストタウン専用Webサイト、今、ご覧いただいておりますが、すでに500以上登録のあるホストタウンの情報を、国内外に発信するために開設されたものです。大きく三つの特徴がありますので、簡単にご紹介をさせていただきます。

まず一つ目は、全国のホストタウンページがご覧いただけるコーナーです。Light up HOST TOWN Project、自治体、それから受け入れる相手国・地域、競技という三つのカテゴリでホストタウンを検索していただくことができます。ここで例えば「岐阜県」と入力いたしますと、岐阜県のホストタウンのリンクページがご覧のように出てきます。それぞれのホストタウンが登録された経緯であるとか、受け入れ予定の相手国・地域、そして競技などの情報を知ることができます。

次に二つ目は、ホストタウンの活動予告・報告です。全国のホストタウンでは、来年の東京大会本番に向け、受け入れる相手国・地域をより深く知っていただくための文化体験会、あるいはパラリンピック競技を実際に体験いただけるパラスポーツ体験会、事前合宿など、各自治体で行われるホストタウン関連イベントの予告・報告の記載をしております。イベントが一般参加を受け入れているのか、あるいは参加者限定なのかも記載されておりますので、一般参加と記載がある場合は、どなたでもご参加いただくことができますし、参加者限定の場合は、こちらのホームページ上でチェックをしていただくことができます。

そして三つ目、最後は企画コーナーになります。先ほどは各自治体で行われるホストタウン関連イベントの情報の紹介をさせていただきましたが、Light up HOST TOWN Projectでも様々な企画ページを掲載しております。国内外のアスリート等からホストタウンへ向けたメッセージ動画、自治体から相手国・地域の皆さんに向けた応援メッセージ動画、自治体による相手国・地域の国歌の合唱動画とい3種類が掲載されております。この応援メッセージの動画企画では、すでに70以上の動画が掲載されておりますので、今日はそれぞれ1種類ずつ、三つの動画を紹介させていただきます。それでは三つ続けてご覧ください。

(映像)

いかがだったでしょうか。このようにLight up HOST TOWN ProjectのWebサイトでは、日本全国のホストタウンの様々な情報に簡単にアクセスをしていただくことができます。本日オンラインシンポジウムをご視聴の皆様も、ぜひ皆さんご自身のふるさと、今住んでいらっしゃる地域がホストタウンになっているのかいないのか、ぜひ検索をしていただければと思います。ホストタウンのことを知って、関わってみたいと思われれば、ぜひその活動に参加をしていただけないでしょうか。よろしく願いいたします。

それでは2部にまいりたいと思います。準備のほうが出来次第ということで、再開させていただきます。

ければと思います。

## 5. パネルディスカッション

司会：

さて、ここからのお時間は、様々な立場の皆さんによるパネルディスカッションを行っていきます。「with コロナ、after コロナにおけるホストタウン交流の在り方について」、ホストタウン交流がどうあるべきか、これからどんなことができるのか、皆さんのお話をお聞きしていきたいと思います。

それではパネルディスカッションに参加される皆さんをご紹介します。ファシリテーターはフィールド・フロー株式会社、渋谷健代表取締役です。渋谷様は東京の恵比寿のスタジオからのご登壇になります。渋谷様、よろしくお願いいたします。

渋谷：

渋谷です。よろしくお願いいたします。僕自身もホストタウンアドバイザーとして地域に関わっていますので、今日のお話を大変ありがたく思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

司会：

よろしくお願いいたします。続いてこちら、岐阜グランドホテルにお集まりの皆さんもご紹介してまいりましょう。まず 2016 年リオオリンピックに、ホッケー日本代表のキャプテンとして出場されました、岐阜県ご出身の木村未由希さんです。続いて 2012 年ロンドンパラリンピックに、ゴールボール日本代表として出場し、見事金メダルに輝かれた中嶋茜さんです。中嶋さんも岐阜県のご出身です。続いて岐阜県立岐阜農林高等学校から後藤侘奈さん。蒲原泉美さん。そして岐阜県の行政としての立場から、岐阜県ホストタウン担当部署の清流の国推進部地域スポーツ課、大川敦課長です。そして内閣官房東京オリンピック・パラリンピック推進本部の勝野美江企画・推進統括官です。なお勝野様も渋谷様と同様、東京の恵比寿のスタジオからのご登壇ということになります。勝野様もよろしくお願いいたします。

それでは渋谷さん、皆さん、よろしくお願いいたします。

渋谷：

ではここから、私、渋谷がご進行をさせていただきたいと思います。今日は「with コロナ、after コロナにおけるホストタウン交流の在り方について」ということで、皆さんとお話をしていきたいと思えます。

この with コロナ、after コロナが入ったことによって、ホストタウンの意味、意義が大きく変わったと考えています。今日ここまで皆さんにお話しいただきましたが、大変皆さん難しい中でチャレンジをされていると思います。このチャレンジを越えるというところで、すでにホストタウンの意味自体が社会的に生まれてきていると捉えています。このホストタウンの在り方、さらに探求していけば世界に通じる何かがある。で、政府広報にもあります世界はもっとひとつになれる、そこにつなが

る。これは SDGs で言うところのグローバルパートナーシップにつながることであり、世界の問題解決につながるアクションだと思っております。この部分について、皆さんから、まず足元から何をしたいか、そういう話ができればと思っております。

実際コロナによって私たちに突きつけられた問題は、非常に簡単です。この複雑で非常に困難な状態で Give Up してしまうか。それともこれをきっかけに成長して、次のステージに向かうか。たとえどんなことがあっても、この1年間で起きたことというのは、人類にとって大きな学びであるし、地域にとっても大きな学びであると考えています。そして私たち一人ひとりが成長する、大きな大きな機会だと思っております。だからこそ、今日この場から皆さんが成長していくためのきっかけ、考える時間、そこにつながるような場にできればと考えております。

パネルディスカッションというのは、ただ聞き流すだけだと非常にもったいないので、見ている皆さんに幾つかのお願いです。登壇されている皆様が、いろいろな方たちの代弁者だと思ってください。選手の代弁者であったり、地域の代弁者であったり、そういった皆さんの代弁者としての声を聞きながら、自分自身の体験であったり、自分自身の周囲を投影して、皆さん自身の気づきを得ていただければと思います。その気づきを持って、ぜひ身の周りの方と対話を始めて、このホストタウンというアクションから何を生み出せばいいのか。今後どうしていけばいいのかといったところを、深めていただけたらと考えております。

本日は大きく三つの話を、皆さんとしていきたいと思っております。今日はいろいろな方々に登壇いただきます。それぞれの皆様にとって、「ホストタウンって何だろう」「ホストタウンとどう関わっているのだろう」といったところを、まずは最初にお話しいただきたいと考えております。二つ目として、新型コロナウイルス、いろいろな影響があったと思います。実際どんなことがあったのか。それぞれの皆様の立場から、お話しいただきたい。そして最後に、「with コロナ、after コロナ」というところを見据えて、ホストタウン、さらにその先で何をしたいか、そんなところでアイデアを共有していければと思います。

それでは早速ですが、お一人目、オリンピックとしても活躍されてます木村さんのほうから、ホストタウンとの関わりといったところで、お話しいただけたらと思います。よろしくお願いたします。

木村：

よろしくお願いたします。元女子ホッケー日本代表の木村未由希です。私はホッケーの街である岐阜県の各務原市出身で、中学の頃からホッケーを始めて、高校3年生のときにアテネオリンピックに出場してから、北京、ロンドン、リオと4大会、オリンピックを経験しました。2016年に選手は引退していますが、今日は当時のことを思い出しながら、選手の立場として意見を交流できたらと思っています。よろしくお願いたします。

渋谷：

よろしくお願いたします。続きまして、パラリンピアンとしての中嶋さんからの話をいただけたらと思います。よろしくお願いたします。

中嶋:

よろしくお願いします。2012年のロンドンパラリンピック、ゴールボール競技で金メダルを獲得したチームの一人です。私が競技に出会ったのは中学生の頃で、大学生のときにロンドンに行きました。現在ゴールボールはもちろんですが、パラスポーツの普及や、人権や福祉、多様性といったところで講演などを行っています。私はホストタウンというのは、今まで関わりはあまり分からなかったのですが、このホストタウンというのは、きっと選手の立場からすると、とても応援してくれる、もう一歩背中を押してくれる存在ではないかと思っているので、あとパラアスリートとしての視点から今日はお話しさせていただけたらと思います。どうぞよろしくお願いします。

渋谷:

ありがとうございます。木村さんと中嶋さんは実際にアスリートでもあったという立場から、生の選手の声、そして周りの皆さんの体験されたような声も後で伺えたらと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。続いては非常に若い世代からお二人、お話しさせていただきたいと思います。岐阜農林高校の後藤さんと蒲原さん、お二人からもぜひお話をいただけたらと思います。よろしくお願いします。

後藤:

岐阜農林高校3年流通科学科の後藤侖奈です。私たち岐阜農林高校はカナダとのホストタウン交流を進める岐阜県と連携し、カナダ選手に向けて、私たちが栽培する食材を使ったおもてなしに取り組んでいます。昨年には内閣官房主催のGAP食材を使ったおもてなしコンテストに出場し、私たちが栽培するGAP認証米に加え、岐阜県中のGAP食材を使ったおもてなし料理と、私たち生徒自身による神前結婚式の披露を企画しました。このおもてなし料理と結婚式を組み合わせた企画は、岐阜県在住の外国人や関係者の皆さんに披露し、大変な好評を得ました。この企画は、コンテストで内閣官房オリパラ事務局長賞を受賞し、それにより橋本大臣との意見交換もさせていただきました。橋本大臣から直接激励のお言葉をいただき、とても感激しました。昨年取り組んだメンバーは卒業するので、カナダ選手へのおもてなし企画に込めた思いを後輩に託したいと思います。

蒲原:

岐阜農林高校流通科学科2年の蒲原泉美と申します。私たち2年生は先輩たちのおもてなし企画を応援するとともに、GAP認証の農産物の生産を行ってきました。来年のオリンピック・パラリンピックのために、GAPの学習を継続し、JAさんとの協力で新たに新品種「にじのきらめき」を研究栽培しましたので、新しいお米もメニューに加えます。また私は来年度おもてなしの花嫁役に抜擢されましたので、先輩たちの思いを引き継ぎ、カナダの陸上選手たちに余すところなくホストタウン岐阜県の魅力を伝えたいと思っています。

渋谷：

後藤さん、蒲原さん、ありがとうございました。本当に地に足ついたおもてなしの準備、ホストタウンとしての準備をされているというところでもございました。この後、大川さんと勝野さんにも一言ずついただきたいと思っております。皆さんのお話を聞いて、特に新型コロナウイルスで大変だったことや、この先どんなことをやったらいいかというお話をいただこうと思っておりますが、この場に対する期待であるとか、皆さんのお話を受けて今感じること、率直なところをお二人からいただければと思います。まずは大川さん、お願いしてもよろしいでしょうか。

大川：

岐阜県地域スポーツ課の大川でございます。私、地域スポーツ課というところで仕事をしておりまして、常にスポーツで地域をどういうふうにも元気にしていくのか、地域を活性化できるのかということを考えております。その中でホストタウンという、国で考えていただいた仕組み、企画というのは、スポーツのみならず、スポーツから国際であるとか、食であるとか、共生であるとか、いろいろな手掛かりを含んだ、非常に大きなきっかけをいただきまして、今日高校生の皆さんにもご参加いただいておりますが、大変な広がりを持っていくものだと思っております、大変やりがいを感じているところです。

渋谷：

ありがとうございます。大川さんの立場だと、ここに高校生のお二人がいるというのは、非常に大きい価値があるのかなと、次の世界につなぐお二人が直接いるというのは、ありがたいことなのかなと受け取りました。そしてホストタウンとしてやっていただきたいことを、非常によくやっていたいでいるので、勝野さんとしても嬉しいと思うので、勝野さんにもコメントをいただきたいと思いません。

勝野：

ありがとうございます。本日は岐阜県総出で応援をしていただいて、ホストタウンの取り組みを全国の皆さん、そして世界の皆さんにお知らせをするというシンポジウムを開催していただいて、ありがたいなと思いつつ、前半からお話を聞いていました。私はホストタウン全体を担当しておりますが、日本の食材、食文化を世界の皆さんに発信しようという取り組みもしております、前半の議論から GAP、Good Agricultural Practice の頭文字ですが、この取り組みも推進しております。東京オリンピックの食材調達基準に位置付けられていますこの GAP 認証。この認証を岐阜農林高校さんも取得をされて、先ほどおもてなしコンテストに参加をいただいたと。岐阜県は日本全国の中でも、GAP の推進に本当に早くから取り組まれておられまして。古田知事が陣頭指揮を取って、2017 年、2018 年から様々な取り組みを進めていただいております。

一つ紹介したいのが、全国の全県、まず GAP を推進するためには、この食材を県庁の食堂で

使っていただくというのが、まずは海外を迎える上で大事ではないですかという投げ掛けをしたところ、2018年6月に岐阜県庁の職員食堂で初めて、日本で一番最初に職員食堂でGAP食材を使っていたのが岐阜県さんでした。このときは古田知事自ら食堂に行かれて、職員の皆さんと一緒に食事をされたと聞いておまして、全国に先駆けた取り組みを常にいただいているということをご紹介したいと思います。今日はそういった取り組みの最先端で頑張っている岐阜農林高校さんのお話も聞き、そして岐阜の素晴らしい食材を世界の選手に食べていただくという観点で、選手の皆様からもぜひアイデアをいただけたらとも思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

渋谷：

ありがとうございます。そういう意味では、ホストタウンというのは地域の世界レベルの、世界標準取組というふうに上げていくことであったり、地域間の知恵をつなぐことであったり、地域のブランドそのものをつくる、あとは地域内の交流をつくるということでもすごく効果があるのかと、改めて受け取りました。ただこのコロナですごく大変なことが、選手のほうでも、地域のほうでもあったのかなと思います。この辺りは僕のような中途半端な人があれこれ語るよりも、選手の皆さん、地域の皆さんで語ったほうが伝わるものが多いかなと思うので、また木村さんのほうから、新型コロナウイルスでどんなことが大変だったか、特に現役の選手の皆さんとの交流があるかと思いますので、そういったところで伺った話なども含めて、いただけたらと思います。木村さん、お願いしてよろしいでしょうか。

木村：

私も選手の立場ではないので、現役の子に連絡を取って聞いてみましたが、やはり自粛期間は普通に生活するのもままならない状況で、トレーニングというよりも、気持ちの面で切り替えがすごく難しかったということと、私はホッケー競技なので、チームで活動していますが、チームのみんなとコミュニケーションが取れなくなったということがすごくマイナスだったということで、どうやって工夫したかというのは、リモートでトレーニングをしたということで、チームのみんなの顔が見えるので、そういうところでコミュニケーションを取って、自宅でできる体幹トレーニングやヨガをやったりして、自粛期間で気持ちが沈んでしまうところを、みんなの顔が見れて、そういうところでその時期を乗り越えられたと聞きました。

渋谷：

皆さんが気持ちが滅入ってしまうところ、そこは一人ひとりのつながり、選手同士の関係性があったからなんとかあったところだったのですかね。

木村：

どうしても一人になりがちなところを、これはチームの特権だと思いますが、みんなでつながるこ

とによって、また目標に向かって頑張ろうという気持ちになれたと言っていました。

渋谷：

地域とのつながりであったり、チーム内はそうだとすると、応援してくれる皆さんとのつながりというところは、難しいところがあったのでしょうか。

木村：

まず試合ができなかったので、ホッケー競技で言うと、4月にその年のリーグが始まったりしますが、そういう試合ができない状況でもありましたし、試合が始まってリモートマッチということで無観客試合になっているので、つながりというところでは、地域の方とは難しかったのではないかと思います。

渋谷：

海外の選手の皆さんも、なかなか地域や、ファンの皆さんとつながる機会が減ってしまっているかと思いますが、ホストタウンでもし交流ができれば、選手としてはどうでしょう、嬉しいものでしょうか。

木村：

そうですね。私も第1部のお話を聞かせていただきましたが、選手の立場で言うと、ホストタウンの地域の方とつながれるというのは、すごくプラスだと思っていて、実際オリンピックが今年行われたら良かったのかもしれないですが、リモートで遠く離れた日本の国と、自分たちを受け入れてくれる地域の人とつながれるというのは、安心感というか、来年に向けて、自分がどういう準備をしていけばいいのか、環境も食事のこともそうですし、そういう面では、いろいろ自分が不安に思っていることを聞けるというか、そういう安心感があったのではないかと思います。

渋谷：

木村さんご自身も実際に海外に遠征されて、初めての場所に行かれることもあったと思うんですね。不安なことや心配なこともあったと思います。そういうときに地域との交流で、自分が勇気づけられたとか、その経験からこういうことを地域でやったらいいんじゃないかを感じるものがあれば、ご紹介いただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

木村：

私は今までホストタウンという形では経験がなくて、その話を聞いていて、選手の立場だったらすごくありがたい取り組みだと思いましたが、異国の地に行くということは選手からするとすごく不安で、代表選手だと守られていると感じるかもしれませんが、食事や、練習会場の環境、気候、そういう面でも全然違うので、大会ごとに私も「この地域に行くなら、どういう服装を持っていこう」とか、



自分が 100%の力を出せるように事前に準備していきますが、どうしても調べても分からないこともあると思うので、そういう面では、ホストタウンの人たちに聞けるという環境があれば、すごくプラスだと思いましたし、ホストタウンのつながりは私はありませんでしたが、例えば試合会場で日本の旗が見えたり、国歌が流れたときに、海外のチームでも日本の国旗を持って応援してるよと声を掛けてくれたときには、すごく力になったし勇気をもらいました。

洪谷：

ホストタウンはきっと選手に勇気を与える存在になるんでしょうね。

木村：

そうですね。

洪谷：

ありがとうございます。続いて、中嶋さんにもお話を伺えたらと思います。改めて中嶋さんの場合だと、パラアスリートというところもありますので、パラリンピアンとして、新型コロナウイルス、影響をいろいろ受けたと思いますが、その辺り、どのようなことが大変でしたでしょうか。

中嶋：

私も現役からは少し離れてしまっているので、チームのことや、ゴールボールの他の選手のお話を聞いていると、チームでたくさん的人数でやるということもあって、こまめに換気をしたり、アルコール消毒を定期的に行っているというのは聞きました。パラアスリートという視点からいくと、競技のときもちろんですが、競技以外でもたくさんの方のサポートを必要とすることが多いので、今回のコロナで、感染リスクからなかなか大変だったことが多かったのではないかと、それぞれ工夫しているのではないかと考えています。私も視覚障害があるので、人に聞くことも結構多いのですが、私自身も人に何かを聞くときに、聞いていいのかなと少しためらったり、逆に声を掛けてくれる人のほうがためらってしまうだろうなと感じているので、なかなかコロナで大変なこともあるかと思っています。

洪谷：

ありがとうございます。そういう意味だと、選手として試合に集中しなければいけない、それ以上にいつも関係性など、コロナの感染症対策にかなり神経を使わなければいけないことがあったかと。現役の皆さんのことを思うと、それはパフォーマンスにかなり影響したのではないかと思います。その辺りはやはり皆さんストレスを感じていたのではないかと思います。いかがでしょうか。

中嶋：

日常生活を普通に送るのもすごく大変な時期であったと思うし、競技に使うものであったり、床

や壁も見えていないので、全部触って確認するので、そうなるのと全てのところを消毒しなくてはいけなかったりして、大変だったのではないかと思います。

渋谷：

想像するに、そこに何かしら周りでサポートできたら、ストレスがすごく減ったのではないかと思います。想像の域で構わないですが、どんなサポートがあれば、選手は楽になったと思いますか。

中嶋：

ソーシャルディスタンスというので、どうしても人との距離を離さなくてはならないときではあります。それでも声を少しでも掛けていただけると、力強いと思います。

渋谷：

何に困っているかというのを、聞かないと分からないのがありますので、僕らみたいな素人は「どうしたらいいですか」と聞くしかない。それは気軽に聞いたほうが良かったということでしょうか。

中嶋：

聞いてくれるのが一番うれしいです。

渋谷：

ありがとうございます。ぜひ地域でパラアスリートを迎える皆さんは、ソーシャルディスタンスを保ちながら、ちょっと大きい声で話せばいいですね。自分から声を掛けることが大事だということをしていただきました。ありがとうございます。

中嶋：

ありがとうございます。

渋谷：

続いて、岐阜農林高校のお二人にもお話しいたきたいと思います。受け入れる側としていろいろ準備されていたと思いますが、企画がだんだん変わってしまったところもあると思います。その辺りで大変だったことをいただければと思います。後藤さん、蒲原さん、お願いします。

後藤：

おもてなしコンテストの事務局長賞を受賞したことで、東京での表彰式に出席できるはずでしたが、新型コロナウイルスにより中止になってしまいました。さらに私たちの目標であったカナダ選手

への直接のおもてなしも、東京オリンピック・パラリンピックが延期されたことにより、カナダチームの岐阜での事前合宿も延期となり、私たち自らがカナダ選手をおもてなしすることができなくなりました。おもてなしコンテストのトロフィーが郵送されてきたのですが、トロフィーを見たときは、うれしさと同時にとても悲しかったです。でも東京オリンピック・パラリンピックの延期は、逆にチャンスにつながると先生に励まされ、私たちの取り組みを新たに2年生の後輩たちに託すことになりました。後輩のみんなには私たちの熱い思いを引き継いでもらおうと同時に、延期された1年を活用し、さらにバージョンアップしたカナダへのおもてなしを期待しています。

渋谷：

蒲原さんは特にはないですか。

蒲原：

はい。

渋谷：

ありがとうございます。先ほどカメラにアップになりましたのが、トロフィーですよ。こちらが届いたそうですが、残念ながら延期になってしまったので、また来年に持ち越しというところで、来年は蒲原さんがそれを引き継いで頑張ってくださいというところですね。地域のほうもやるのがだんだん変わってしまって、蒲原さん、何を出されているのでしょうか。

蒲原：

おもてなしコンテストで事務局長賞をいただいたときの賞状です。

渋谷：

素晴らしいです。GAP 食材を使ったおもてなしコンテストというところで。ちなみに蒲原さん、お米をやっているとおっしゃっていましたね。

蒲原：

はい。

渋谷：

その辺りも何かコロナで影響があったりしましたか。

蒲原：

コロナでお米に影響したことはあまりなかったのですが、お米などを買いに来てくれるお客さんが、コロナ前に比べて少し減ってしまったので、そこが残念な点ではありました。

渋谷:

今回のホストタウンを通じて、地域のお米、GAP 食材としてのお米もぜひ発信して、岐阜のブランドに貢献していただければと思います。ありがとうございます。

蒲原:

ありがとうございます。

渋谷:

ここまでのお話踏まえて、選手の皆さんたちの要望であったり、考えていること、感じていること、あとは地域での取り組みということ踏まえて、実際に地域の行政という立場でいろいろサポートされている大川さんから、このコロナウイルスで、改めて皆さんの話を受けて、感想や、本当に大変だったと思うことを、改めていただいてもよろしいでしょうか。

大川:

選手の皆さんですとか、参加される住民の方の安全が一番大事ですので、コロナの感染が拡大してきて、4月、5月辺りは、スポーツは振興したいけど、スポーツ施設、スポーツイベントを所管するわれわれとしては止めざるを得ないというジレンマといいますか、苦しいところがありました。コロナの特徴はそういうことなのだろうと、改めて実感しました。

またホストタウンということ言いますと、日本だけではなくて、国際的な、あるいは地球規模をより実感したところございまして、こちらで良くて、いろいろな国と連絡を取りながらやっていますが、4月や5月は連絡が全く取れない状態、向こうがロックダウンされている状態、そこから少しずつ戻ってきて、やっと今日発表したような交流ができましたが、またこれがどうなっていくのかわからないというところが、コロナの日本の状況だけではなくて、世界というものに対峙しなければいけないという難しさも実感したコロナの影響でございました。

渋谷:

ありがとうございます。ただ一方で、悪いことばかりでもなかったのかなと勝手に思っていて、一つはオンラインでの交流の機会がすごく増えたり、準備しなければいけないことが増えた分、相手のことを理解したり、こちらのことを伝える機会がすごく増えたのではないかと思います。その辺りは実際どうでしたか。

大川:

おっしゃるとおりです。オンライン、SNS という力をまざまざと実感しました。特徴としては全世界につながるということで、この間もやりましたオンラインのイベントもリアルタイムで向こうと話ができる。そうすると実際にこちらに来ていただいたときには、数少ない人たちとの交流で、しかも限ら

れた時間となるのかもしれませんが、テクノロジーを使うことによって、長い時間に深い交流ができたというのも、コロナで分かったことの一つの財産、意外な財産があったということです。

渋谷：

イベントだけではなくて、オンラインでつながったことで、少なくとも継続しやすい環境がすでに生まれましたからね。ぜひこの財産を次につなげていけたらと思います。この辺りを踏まえて、勝野さんのほうから、全国を踏まえて、新型コロナの影響であるとか、今のお話を踏まえて、改めて感じたことなどを共有いただけたらと思います。

勝野：

先ほど大川課長からオンライン交流の素晴らしさ、可能性というコメントをいただきましたが、私も全国のホテルタウンで、オンラインあるいは SNS、あるいはお手紙、様々な形での交流の手段を皆さんが駆使して、なんとか相手国の選手の皆さんとつながろう、そして応援しているよという気持ちを伝えよう、あるいは心配している気持ちを伝えようという、温かい気持ちのやりとりというものが、全国的に行われていることが素晴らしいなと思い、拝見しています。そういう素晴らしい絆がすでにオリンピック・パラリンピックの開催前に、世界でできあがってきているということ発信していくのが、私たちの役割かと思っております、今日のシンポジウムもその一助となればなと思います。

渋谷：

ありがとうございます。そういう意味では、コロナが発生したことによって、オンラインを通じた地域間のコミュニケーションや、海外のコミュニケーションが増えて、関係性もつくれてきた。ある意味、ホテルタウンという取り組みに関しては半分ぐらい達成されてきた感じがしますが、その辺りいかがでしょうか。

勝野：

先ほど平田事務局長のコメントにもありましたが、これからレガシーをつくっていきましょうというお話をしているところですが、共生社会のホテルタウンができたんですね。先ほど中嶋さんのお話もありましたが、地域がパラリンピアンを受け入れることによって、社会全体、障がい者の方だけではなくて、赤ちゃんからお年寄りまで、皆さんに優しい街になりましょうという旗印をあげている自治体が、もう100近く生まれていたり、かなりのことができてきている。ただ、やはりオリンピック・パラリンピックを開催することで、これを世界に向けてさらに発信していく大きな力になると思いますので、まさにそれに向けて、皆さんにもうひと踏ん張り頑張っていただきたいと思っています。

また交流をこういった形で続けながら、大会時にはやはり選手の皆さん、住民の皆さんに安心して交流をしていただく必要があるので、しっかりとした感染症対策をしていただく必要があります。こちらについては、今までの交流に比べますと、かなり限定された交流。例えば練習を見学するだ

け、今までは一緒に練習ができたところを、ちょっと離れたところから見学するというような形で、しっかりと距離を取ることが必要になってきますので、そういった限定された中で、今度は皆さんの知恵を出して、選手の皆さんに応援している気持ちをどう伝えるかということも、どんどんアイデアを出していただければと思います。

渋谷：

ありがとうございます。まさに今お話しいただきましたが、来年夏にイベントがあります。それが一つのきっかけになって、その先にいかないといけないですね。beyond2020 ですので、先に向けてどうしていけばいいのか、ある意味アイデアで、それを確認したものではなくて、こういうものがあったら素晴らしい、こういうことができたら楽しいよねというところを、皆さんそれぞれのお立場からいただければと思います。今日のメインテーマである「with コロナ、after コロナ」で、ニューノーマルの時代にホストタウンはどうあるべきなのか。次の大会からホストタウンというものが当たり前に残っていくためには、何が必要なのか、その辺りのメッセージを皆さんの立場から、何かあれば僕が全部拾うので好き勝手に言ってください。ではまた木村さんからお願いしたいと思います。こんなふうになれば素晴らしいと思うということをお願ひします。

木村：

好き勝手言わせてもらうと、選手の立場からすると、守られていますがすごく不安だし、いろいろなストレスを抱えて、でも結果を出さなくてはいけないということがあると思うので、そういう不安材料やストレスを少しでもホストタウンの方と交流することによって減らすというか、もし私が選手だったら、ホストタウンという関わりがあつたら、すごく安心できるし、あと1年延期になったことによって、SNS でつながったり、今まで以上につながって、安心感というか、家族のような関わりを持って、オリンピックが終わってからもつながっていける、スポーツだけではなくて、それ以上のつながりが持てる関係性をつくるということがすごく大事だし、選手としたらすごくありがたい取り組みだと思っています。

渋谷：

ありがとうございます。今日動画を送ってくださったアスリートの皆さんも、すごくポジティブで前向きなおっしゃっていただきましたが、きっと不安なことは抱えているので、そんな不安をホストタウンの仲間に気軽に相談できたり、一緒に悩みを解決するためにどうしたらいいか動いてくれる、そんな関係性があるといいなという感じでしょうか。

木村：

はい、そうです。

渋谷：

ぜひアスリートの皆さんを地域の皆さんで支えられるような、そんなまさに関係性ですね。コミュニケーション、そこを大事にしていきたいと思います。ありがとうございます。中嶋さんから、いただいてよろしいでしょうか。

中嶋:

選手にとって、応援してくれる人がいるというのは、すごく大きな力になると思っているので、ホストタウンはそんな存在になるのではないかと期待していて、あとホストタウンという取り組みが2020年のオリンピック・パラリンピックが終わった後も、言葉とか文化とか習慣とか、いろいろな違いを越えて、共生社会の実現みたいところに、一歩大きな力になるのではないかと期待しています。この取り組みが世界をギュッと一つにしてくれないかなと思っています。

渋谷:

ありがとうございます。特にパラリンピアン、パラリンピックという立場から見ると、まずスポーツを知ってもらうことがすごく大事で、スポーツを通じて僕たちが障害と呼んでいるものは何なのか。その人が持っている何かではなくて、社会の障害なので、何かしらコンディションが違う人が、自由に普通に生活できないのは、基本社会の問題なので、それを僕たちが考えて解決するにはどうしたらいいのか、それを小さい子から大人まで真剣に考えられる、その真ん中にパラアスリートがいたり、パラリンピアンがいたり、そんな世界観ができたらいいなと、勝手に今想像しましたが、パラアスリート、パラリンピアンの立場から見ると、そういうアイデアはいかがでしょうか。

中嶋:

本当にそう思っています。いろいろな違いがある人がいて社会は当たり前なんだということが、伝わっていくといいなと心から思っています。

渋谷:

ありがとうございます。本当にいい機会ですから、外国の方も、年齢も違う、体のコンディションも違う、だけどみんな何か新しい価値がつかれる、そんな場にできると素敵ですね。ありがとうございます。続いて受け入れ側から、岐阜農林高校のお若いお二人から、またお話をいただければと思います。どんなチャレンジ、どんな未来を描いているか、その辺りをいただけたらと思います。では、お願いします。

蒲原:

私たち2年生は先輩たちの思いを引き継ぎ、あらたな神前結婚式披露のメンバーを選出し、再スタートを切っています。おもてなし料理のメイン食材となるGAP認証米は、私たち自身が栽培し、10月に収穫を終え、どの品種もとてもおいしくできあがりました。私たち独自のおもてなし料理として、岐阜県の協力のもと、デザートと食後のコーヒーを開発しています。デザートでは私たちが裁

培する岐阜県が誇る富有柿と、カナダのメープルシュガーを使ったオリジナルデザートを開発中です。コーヒーでは私たちがイメージするカナダらしさを感じるコーヒーテイストを目指し、岐阜に住むカナダ人の方々や大使館の協力を得て、カナダらしさをテーマに取材を重ねています。そこから私たちがテイस्टイングして、カナダらしさを表現するブレンドコーヒーの試作をしていく予定です。

コロナの状況もあり、私たちの活動を直接紹介することも難しいことから、私たちの活動風景は岐阜県の SNS に投稿させてもらっており、2021 年に向けて岐阜の方々に、もっともっと岐阜とカナダとのホストタウン交流をしてもらいたいと思っています。最後に、私たちはホストタウンという取り組みがあったことで、東京から離れた岐阜の地から東京オリンピック・パラリンピックに関わることができ、今しかできない貴重な経験をしていると思っています。私たちおもてなしメンバー一同、ここ岐阜から日本の魅力を発信できるよう、最高のおもてなしに向けてさらに準備を進めていきたいと思っています。

渋谷：

ありがとうございます。先ほどからの繰り返しになりますが、若いお二人がこういうチャレンジをされていて、10 年後、20 年後、それが必ず財産になるんですね。ぜひこのタイミングでカナダのお友だちもつくって、実際に向こうに行ったり、世界と交流するきっかけにさせていただいて、東京を通じてではなく、岐阜と世界を直接つなぐ、ローカルとグローバルの関係性をぜひつくって、そこで先ほど取り組んだお米であったり、皆さんのおもてなしの精神であったり、そういうものもお伝えいただけたらと思っています。やれそうですか。

蒲原：

はい、やります。

渋谷：

いい宣言ですね。あとで四方には、時間的に余裕があれば、ホストタウンの取り組み、皆さんにもう一言メッセージをいただきたいと思うので、考えておいてください。また大川さんにもお話ししたいと思います。皆さんのお話を受けて、岐阜の自治体の立場から、with コロナ、after コロナ、post コロナ、その考え方で今後どんなことをやっていきたいか、さらに beyond2020 に向けて、何を改めてやってみたいと思ったか、特に若いお二人の言葉を受けて、お話しただけたらと思っています。お願いできますでしょうか。

大川：

選手のお二方のお話を聞きまして、ホストタウンというものが選手の皆さんを支えることにつながるのだということ、改めて思いました。コロナの影響でなかなか思うようなコミュニケーション、交流ができないかもしれませんが、何か地元の思いや気持ちを伝えられるような交流が本番でもできるといいなと思います。そういったことを行政としてはバックアップしていきたいと思っています。



また beyond ということと言えますと、先ほどの発表でも述べさせてもらいましたが、このご縁を機に、今後の大会についても合宿誘致をしていきたい。そこからまた交流をしていただきたいというのがありますし、今の高校生お二方のお話も伺って、こういった若い方、子どもたちが、このホストタウンの交流によって、何か考えるきっかけをつかんでいただいて、それが新たな交流につながっていく。それをまた行政としてはバックアップしていきたい。そんな思いを強くしました。

洪谷：

ありがとうございます。今回ホストタウンに関わっている方、正直全員ではないですね。地域の皆さんではない。まだまだ一部の方です。ただ、確実に新しいきっかけが生まれていて、これは伝播するものなので横に広げていく、そして世界もつないでいく、それができると、もしかしたら 10 年後、20 年後、岐阜は大きく変わっているかもしれませんね。ありがとうございます。大川さんは、あとで一緒に頑張っているホストタウンの皆さんにも一言メッセージをいただけたらと思いますので、ちょっと考えておいてください。勝野さんも、これから post コロナに向けて、こんなことやれたらいいよねというところを、お立場を外れて妄想的にお話し頂けたらと。お願いします。

勝野：

これからは皆さんの創意工夫が試される時期になっていると思います。自分でできない、大変と下がるのではなく、どうやればできるかという発想で、いろいろな工夫ができるのではないかと思います。例えば食事もしゃべらないとか、みんな同じ方向を向いてという味気ないものになりますが、選手が来たときに、どうやって喜んで食べてもらうか。例えばビデオの映像で、岐阜農林高校の生徒が一生懸命栽培している様子を見せよう、あるいはメッセージを流す、あるいはお弁当にカナダの国旗を模して、キャラ弁にしてみるとか、様々な工夫があると思います。お部屋の装飾とか、応援・観戦するときも皆さんが別に撮った国家の合唱の音楽を流してみるとか、様々な工夫を凝らして、選手の皆さんが練習に来て、あっと驚くようなことを毎日仕掛けて、日本ってすごいな、岐阜県すごいなと思わせるようなことを、どんどん仕掛けていただけるとありがたいと思います。

洪谷：

日本の教育は割と詰め込みで、言われたことをやりましょう、これが正解です、それをやりましょうでしたが、その限界を今、日本全体が迎えているわけじゃないですか。ある意味コロナで窮地に立たされた。でもこれは創造性を覚醒させる大きいチャンスで、実際高校生のお二人は創造性を持ってチャレンジしている。これが地域全体、世界全体にも伝播したら、きっとまた何か変わるんですね。そういった創造性を高める良いチャンス、そんなふうに取り組みましたが、いかがでしょうか。

勝野：

岐阜農林高校の神前結婚式という発想は、本当に素晴らしい取り組みだったと思います。さら

にアイデアを出していただいて、県庁の皆さんや市役所の皆さんが、「もう勘弁して」と言うぐらい、高校生からいろいろなアイデアを注入していただけるとありがたいと思います。そして岐阜農林高校だけではなくて、県内のいろいろな高校生、小学生、中学生にもこの取り組みを広げるということも、チャレンジいただけるとありがたいと思います。

渋谷：

余計なお世話かもしれませんが、アイデアを出すコツは楽しむことなので、ぜひ楽しんで。アイデアを出すことを義務にするとすごく大変ですが、楽しんでやるとすごくいっぱい出るので、ぜひ楽しんでアイデアを出していただければと思います。

それでは最後、もう一巡させていただきたいと思っていて、残り5分ぐらいなので、今日のお話を踏まえて、ホストタウンの取り組み、いろいろな立場から関わっている方がいらっやっています。すごく大変な状況にあると思います。そういった皆さんに応援のメッセージ、皆さんから一言ずついただけたらと思います。また木村さんからお願いしてもよろしいでしょうか。思いつくもので結構です。

木村：

選手の立場からすると、ホストタウンの取り組みはすごくありがたいことだと思っています。海外の選手は、もちろん自分の国のことも大好きですし、自分の競技も大好きだと思っていますが、自分の国のことや競技のことを、日本の決まった地域の方が応援してくれているということが、すごく安心感にもつながると思いますし、パワーもいただけたと思います。コロナの状況で大変なこと多いかと思いますが、ぜひ本番のオリンピック・パラリンピックに向けて、できるかぎり選手と交流を持ちつつ、また地域の認知度も大事になってくると思うので、受け入れる国の選手が安心して、その地域でトレーニングを積んだり、地域の方と交流ができるように、いろいろところで活動をして、認知度を広げて、選手に安心感・勇気を与えていただきたいと思います。今日はありがとうございました。

渋谷：

ありがとうございました。続いて、中嶋さんからもお願いします。

中嶋：

コロナの状況で大変な中だとは思いますが、ホストタウンという取り組みが、きっと2020のオリンピック・パラリンピックを越えて、言語や文化、習慣、もちろん障害やいろいろな違いを越えて、世界が一つにつながっていける、そんな大きな力になる、それがホストタウンの取り組みではないかと、今日改めて感じたので、ぜひその取り組みをこれからも続けてほしいと思います。選手にとって、応援してもらえるというのは、本当に大きな力となりますので、ぜひ取り組みを続けていってもらえたらと思います。今日はありがとうございました。

洪谷:

ありがとうございました。では岐阜農林高校の後藤さんから、頑張って一言言ってみてください。

後藤:

今回選手の皆さんと直接会話させていただいて、気持ちの面での不安なことが多いと分かったので、私たちがおもてなしすることで、少しでも選手の皆さんの力になれたらと思います。ありがとうございました。

洪谷:

ありがとうございました。蒲原さんもお願いします。

蒲原:

ホストタウン交流に関わらせてもらうことはなかなかないので、その機会を通して幅広い世代の方や、幅広い国の方と交流を持って、さらにオリンピックへの興味を深めていって、周りの地域の方にも広めていけるように頑張っていきたいと思います。ありがとうございました。

洪谷:

ありがとうございました。二人ともすごく立派でした。ありがとうございます。大川さんから、一緒に頑張る地域の皆様に一言いただいてもよろしいでしょうか。

大川:

全国で頑張っているホストタウンの皆さん、コロナの関係で大変だと思います。私はこれまでの交流を通じて、こういった活動が選手の皆さんや住民の皆さんの笑顔につながるということを実感しております。大変な中ではありますが、一緒に頑張りましょう。

洪谷:

ありがとうございます。勝野さんからもお願いします。

勝野:

多くの選手の皆さんが、ホストタウンのことを自分の家に帰ってきたみたいと褒めてくださいます。ぜひ岐阜県の皆さん、そして全国のホストタウンの皆さん、来年の大会に向けて、コロナに負けずに、コロナとともに、そしてコロナを越えて、20年、30年後も続く交流をつくっていただければと思います。今日は本当にありがとうございました。

渋谷:

ありがとうございました。最後、僕のほうで引き取らせていただきたいと思います。今日一連の話を聞いていて、beyondという言葉が2020にかかっているだけではないのだと感じました。いろいろな枠組みや限界がある、それを越えていくというbeyondって名前が変わっているんだなど。交流にもすごく深い意味があって、そこには安心が必要であり、一人ひとりの創造性が必要で、皆さん自身が選手も地域も、いろいろな立場の人がプライドを持ってそこに関わること、しかもそれを楽しくやっていくこと、それを続けていくこと。それは地域に対する愛であったり、スポーツに対する愛であったり、周りの人たちに対する愛情だったりする、それを大切にして、人間の根源的なところに戻って、このホストタウンは描いていく必要があると感じました。皆さん、愛情を持って、愛を持って、ホストタウンに関わっていただけたらと思います。今日は本当に貴重な時間をありがとうございました。以上でパネルディスカッションを終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

司会:

皆さん、どうもありがとうございました。まだまだお話をお聞きしたいところではありますが、オンラインシンポジウム終了のお時間となってしまいました。今オンラインで視聴されている皆さんも、ホストタウンについて考えるきっかけに、今日のこの番組をきっかけにいただければと思います。皆さんがお住いの地域がホストタウンに登録しているかどうかをチェック、ひょっとしたらどの国のどの競技というのをチェック入れていただくだけでもいいかもしれません。改めて渋谷さんをはじめ、本日パネルディスカッションにご参加いただいた皆さん、本当にどうもありがとうございました。

それでは閉会に際しまして、岐阜県ホストタウン担当部署の清流の国推進部、丸山淳次長よりご挨拶を頂戴したいと思います。丸山様、よろしく願いいたします。

## 6.閉会挨拶

丸山:

皆さん、こんにちは。岐阜県の清流の国推進部次長の丸山です。まずもって本日は、内閣官房東京オリパラ推進本部事務局におかれましては、この岐阜県でシンポジウムを開催していただいたことに、厚く御礼申し上げます。この機会を頂戴したことによりまして、先ほど事例発表をした岐阜県、そしてホストタウンや各市町の取り組みというものが、このような形で全国に情報発信できたということは、非常に光栄に思っております。

またパネルディスカッションでは、岐阜県出身のオリンピック・パラリンピアン選手目線からのご意見、そしてまさに海外の選手を受け入れて交流をするという、担い手の目線ということで岐阜農林高校の生徒のお二人からのご意見、そして実際にホストタウン交流を今進めている行政の視点から、岐阜県の担当課長からの意見ということで、コロナ禍でいろいろな困難があって、課題もあるよという話がかかり出ましたが、かえてこの状況だからこそ、ホストタウン交流というものが期待があるものだという話もございました。そこにファシリテーターの渋谷さん、そして内閣官房の

勝野統括官がまさに叱咤激励、励ますという形で、私もホストタウンを推進する担い手の一人として、これからもっと頑張ろうと意を新たにしたところでございます。

いずれにしましても、このシンポジウムを通じて、with コロナという新しい環境下におけるホストタウン交流が全国に広がりまして、競技会が行われる都市のみならず、地方にも東京オリンピック・パラリンピックの活力というものをしっかり呼び込む契機となればと思っております。最後になりましたが、内閣官房におかれましては、引き続きホストタウンを担う自治体をご支援いただくとともに、全国各地で実りある交流が行われまして、東京オリンピック・パラリンピックが大いに盛り上がることを祈念いたしまして、閉会の挨拶いたします。本日はありがとうございました。

司会：

丸山様、どうもありがとうございました。あらためまして本日ご講演いただきました皆さん、ご登壇いただきました皆さん、本当にありがとうございました。以上をもちまして、「with コロナ、after コロナにおけるホストタウン交流の在り方について」オンラインシンポジウムを終了させていただきます。今日お伝えをしたように、この機会にぜひホストタウン専用サイトもご覧になってみてください。ひょっとしたら今ご覧の皆さん、ご自身のふるさとがホストタウンになっているかもしれません。どの国のどの競技のホストタウンになっているのかを確かめていただき、その上でひょっとしたら皆さんも一緒に参加できることがあるかもしれません。ぜひ一緒に参加をしてみてください。

そして政府広報オンラインでは、with コロナ時代の各種政策の特集ページも開設しております。国と地域の皆さんが暮らしに密着した様々なテーマのもと、一つのチームとなって前に進むための情報を発信しておりますので、ぜひこちらもご覧ください。では終了とさせていただきます。本日はご視聴、誠にありがとうございました。

以上